
滅亡へのカウントダウン

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滅亡へのカウントダウン

【Z-ONE】

Z-360E

【作者名】

後藤詩門

【あらすじ】

楽園のような南の島で幸福に暮らす一人の女性。だが、彼女たちは今まさに自殺を考えていたのだ。いったいそれは何故？

青い空に白い雲。

どこまでも続く砂浜に、寄せては消える淡い白波。

ここは赤道にほど近い南の島。

海岸から少し内陸に入れば椰子の木が群生し、その枝先にはカラフルな色の小鳥たちがやつてくる。

さえずりがそよ風と共に運ばれて、耳に心地良い。

南国の風は甘い香りも運んでくる。

それは何種類もの熟したフルーツの芳香。

ここは一年中、食用となる果物が生育するのだ。

果物だけじゃない。

野菜や穀物、ナッツなども豊富に取れる。

海に潜れば、よりどりみどりの魚たちにも出会えるはずだ。

なんとも素晴らしい島である。

その昔、ハワイと呼ばれた島。

まさにパラダイス、地球最後の楽園と呼ぶにふさわしかった。

この素晴らしい場所に、その一人の少女は暮らしていた。

名前はイヴ・トリリス、一人ともまだ18歳である。

彼女達は毎日毎日、透き通るような珊瑚の海で泳ぎまわり、泳ぎ疲れるとヤシの木の木陰で昼寝した。

目が覚めれば、咲き誇る花畠の中をはしゃぎまわり、美味しい果実を見つけてはその甘さに舌鼓を打つた。

まさにゴーットピア。

だが、それももう終わろうとしている。

それが、彼女たち自身の選択だからだ。

実は……彼女たちはこれから自殺することを考えていた。
普通の人間なら、何故そんなことをするのかといぶかしむことだ
るつ。

この生活は、あまりにも勿体無い。

だが、彼女たちは普通の人間ではないのだ。
どんな人間なのだろうか？

外見はいたつて普通。いや、むしろ快活で美しい少女たちである。
それぞれの青春を謳歌しているように見える。それなのに、いつ
たい何故？

では、その理由を説明しよう。かなり長くなるが歴史の授業とで
も思つて聞いてほしい。

さて、全ての始まりは西暦2008年に完成した、革新的な冷凍
技術の開発にまで遡る。

この年まで、生きた人間を冷凍しそして生きたまま解凍する事は
不可能だと言っていた。

体内にある水分が問題なのである。

ご存知の通り水は凍ると膨張する。

よく分からぬ？

そんな方は、空のペットボトルに水道水を満たし、それをご自分の家の冷凍庫に放り込んでもらいたい。

一晩もたてば氷となつた水道水が膨張し、パンパンに太つたペッ
トボトルを目にすることができるはずである。

ともするとその膨張力は、プラスチック製のボトルを破壊するこ
とすらあるのだ。

つまり、これが問題なのである。

体内の水分子も凍る時に当然のように膨張する。

そしてプラスチック製のボトルと同じく、体の様々な細胞をその膨張力により膨らませ、時に破壊してしまうのだ。

そうなると人間はもう生きてはいけない。

解凍してもその体はすでに死体。運良く生き延びたとしても、細胞の破壊されたボロボロの体となってしまう。悲惨でもあり、無惨でもある残りの人生。

もちろん、長生きはできない。

だがこの時代、その難問を解決した人物が登場する。

日本にある東東大学教授、馬胤清一（またねせいじ）、その人である。

馬胤教授は体の水分の大半を占める血液を、特殊な人工透析装置を用いる事で、不凍液に近い物質に変換する技術の開発に成功したのだ。

この技術は後にM A T A N Eシステム、あるいは単にコールドスリープ装置と呼ばれるようになる。

さて、この技術が開発され10年。実用化にこぎつけた頃、これを最初に用いたのは、誰であろう金持ちの老人達であった。

まだ人体実験も十分に行われていなかつたこのシステムに、なぜこれほど地位も名誉もある老人達が申し込むのか、皆が首を傾げた。

その理由としてはまず、なんと言つても彼らには先がない事があげられる。

M A T A N Eシステムの人体実験を何年も待つてゐるうちに、彼らは死んでしまうからだ。

その焦りが……ならばいつその事、自分が実験台にならう、とい

う気持ちにつながった。

さらに別の理由もある。
これは一種のステータスシンボルになることに、彼らは気づいたのだ。

プール付きの豪邸や、運転手付きのロールスロイスと同じく、ロールドスリープ装置付きの別荘、といった感じである。

当時、一台数千万から数億円もするこの装置は庶民の垂涎の的。コレクター感覚でこの装置を手に入れた成金たちも少なくない。

このような理由で、とにかくこの金のかかる技術の先駆者は金持ちの年寄り達となつたのだ。

これが西暦2018年のことである。

さりに10年が経ち西暦2028年になると、この技術は完全に確立されたものとして世間に認知されるようになる。すると今度は金持ちの道楽だけでなく、お堅い国の施設にも活用されるようになつた。

いわゆる、冷凍刑務所の誕生である。

死刑廃止論者達はこれ幸いとばかりにこの革新的な技術に飛び付いた。死刑の代わりをなすものとしてマスク等で紹介を始めたのだ。

世界世論も動き、遂には国連でも協議され、ゴーサインが出る。実験的に2人の犯罪者が刑に服した。

人権を憂慮して名前や犯罪歴は伏せられたが、かなりの凶悪犯であることには間違いない。

彼らは冷凍刑務所で懲役80年を宣告された。

だが、残念な事に冷凍刑務所受刑者は、この一人が最初にして最

後となる。人権養護団体の過激グループがこれすら厳しすぎると異論を唱え、抗議の自爆テロを始めたからだ。

世界各地の主要国で繰り広げられる破壊の嵐。目もあてられない惨劇に、国連もこの刑務所を閉鎖するしかなかつた。たつた一人の冷凍刑務所受刑者は秘密裏にどこかの島に移されて、刑期を終えるまでずっと眠り続ける事になる。

さて、次にこのM A T A N Eシステム、コールドスリープ装置が使われる舞台となつたのは……宇宙である。

時は2038年。人類は遂に火星に向けて本格的な有人飛行を開始したのである。

だが、火星はどんなに速く飛んだとしても、片道半年はかかる長旅。

もちろん、飛行士たちはそのまま起きていても良いのだが、そうするとロケット内の食料スペースが馬鹿にならない。

だが、眠つていれば腹も空かないだろうという事で、狭い宇宙船内を快適に過ごすためにも、この技術は欠かせないものとなる。

こうして人類は火星をその領土とし、コールドスリープ装置はかつてないほど有効利用されるよつになつた。

そしてさらに10年が経つ。西暦2048年のこと。

ここまでくると「コールドスリープ装置は冷蔵庫くらいの大きさになり、まさに家庭に一台の時代となつた。

しかし、ここで大きな社会問題が起きる。

それは、冷凍シンドロームと呼ばれる病気の蔓延で、早い話が鬱病に近いものであつた。

学校で嫌なことがあつた、または会社で上司に怒鳴られた。もういや！ そんな時、そうだ「コールドスリープしよう。こんな感じで学校や会社をサボる者が続出し始めたのだ。

瞬く間に世界的な社会問題となると、国連はこの年、コールドスリープ禁止条例を発表する。

政府の特別な許可がある者以外は、冷凍睡眠してはならないという条例である。以前に眠りについた者も、老人や病人以外はこの年に叩き起こされた。

起きて働け！ とまあこういうこと。

かなり強引な条例ではあつたが、働かない夫や学校に行かない子供たちにうんざりしていた奥様方の支持を得て、この法律は速やかに執行された。

しかし……

平和であったのはここまでである。

これから先の話はあまりにも悲惨。

そのため、記述は簡潔に済ませたいと思つ……

さて、西暦2058年。植民地星となつた火星で、新種のウイルスが発見された。

驚くかもしぬないが、火星はまったくの死の星ではないのだ。原始的な生物の存在が確認されていた。

だから、新種のウイルスの発見もさほど驚きはしなかつた。

ただ研究のため、このウイルスは地球に持ち帰る事よう指示される。

別に隠しはしなかつたのだが、この一件はニュースにもならず、サイエンス雑誌に辛うじて一ページの特集が組まれたにすぎなかつ

た。

この時代になると人類は冥王星にまで手を伸ばしており、火星の記事はもう古いと敬遠されがちだったのである。

さて、西暦2068年。火星から帰ってきたスペースシャトルがアフリカ奥地で原因不明の墜落事故を起こした。

載せてきた新種のウイルスも行方不明となる。簡単な捜索しか行われず、国連はアフリカ関係国に見舞金を支払い、この問題に決着をつけた。

さらに10年後、西暦2078年。

アフリカで奇妙な伝染病発生。

発病後3日で死に至る強力なもので、空気感染する厄介ものでもあつた。致死率は99%、あらゆるワクチンがきかない。

科学者の調べで、それは新種のウイルスが原因と断定される。そう、火星のウイルスであつた。

このウイルスはまさに奇妙なウイルスだつた。

何故ならこのウイルスの感染者は、必ず男だからである。不思議な事に女にはまったく影響はない。

まさに奇妙な伝染病であつた。

この病はあつという間に世界中に広まっていく。

西暦2088年、地球上の全ての男がこのウイルスに感染した。文字通り全員である。99%が死に絶え、生き残った者も寝たきりとなる。

後には……女たちしか残らなかつた。

これは大問題だった。女たちだけでは子はできぬ。つまり、人類はまさに滅亡の危機に瀕してしまったのだ！

もちろん、人間も馬鹿じやない。いつなることを予測し、あらゆる手段をこうじていた。

まずは精子の冷凍保存である。別に画期的でも何でもない手段。百年も前から使われていたものだ。

だが、いざ試してみると……残念ながら失敗に終わる。

実は精子の貯蔵を始めた時、すでにウイルスはほとんどの男に感染しており、その男たちの精子もやはりウイルスに感染していたのだ。

何度、人工受精させてみても失敗続き。

元気に生まれてくるのは女の子だけで、男の子が生まれてくると、生後三日で死ぬ徹底ぶりである。まさに奇妙な伝染病。じつして、冷凍精子はまるで役に立たないことが判明する。

次に女たちは、「ワールドスリープされていた男たちに目を向けた。西暦2048年に、ワールドスリープ禁止条例ができるためあまり数はない。

それでもやるしかない。女たちはすぐ行動する。もちろん、すぐに復活させでは駄目だ。みすみす火星ウイルスの餌食になってしまう。そこで女たちは、その昔アメリカ合衆国ハワイ州としられた島々を特別保護区に指定して、徹底的にウイルスの除去を行つたのだ。島全体を特殊な磁気シールドで覆い、そしてそこにワールドスリープから目覚めさせた男どもを住まわせてみる。

この計画はなんとか成功した。

男たちはウイルスの驚異から守られ、生き延びたのだ。

この成功に、世界中から次々と目覚めさせられた男たちがハワイにやってきた。

そして、世界中から選ばれた美女たちと、酒池肉林の生活を楽しんだのだ。

彼らの役目はただ一つ、子づくりである。

人類は救われたかに見えた。

しかし……

今回もまた、実験は失敗してしまったのだ。

それは何故？

今回の失敗はあの殺人ウイルスのせいではない。

その原因は……老いである。

誰しも老いれば、ナニが弱くなるものだ。

つまり、アレが立たたない事が失敗の理由。
仕方あるまい、コールドスリープ禁止条例のせいでの、当時まで眠っていたのは最初期の者たち……つまり、金持ちのじじいばかりだったのである。

性欲も寄る年波には勝てず……

こうして、この計画は挫折する。

そして、西暦2098年。地球上に生きていた女たちは全てを諦めていた。

男のいない世界……フェミニストたちはさぞ良い世界になるだろうと思われるかもしない。

だが、違った。

犯罪は増え、精神を病む者が蔓延する。自殺者が毎年19%にも及んだ。

ここに至つて国連は一つの重要な決定を下す。
自殺の合法化である。

自殺の合法化、それは地球上から人類といつ存在を速やかに消し去る事を目的とした凄まじい法律である。

もはや、つがいとなる男はいない。

遅かれ早かれ人間は死に絶えるのだ。

ならば、辛い世の中に絶望しながら暮らすよりも、死んで楽になろう。そんな無謀とも言える考え方。

だが、意外にもこの法律は世界中に受け入れられた。

全人類安楽死推進福祉法、それがこの無謀な法律の正式名称だ。世界中の自殺を望む人々に、お望みの自殺方法を無償で提供するのがこの法律の趣旨。

ピストル、毒薬、睡眠薬の多量摂取、飛び降り、入水、リストカットなどなど、ありとあらゆる自殺方法をサポートする。

そして、男のいない女たちは政府の支援のもと次々に自殺していったのだ。

ついに西暦2108年、地球上には一人の女しか残されていなかつた。

それが彼女たち、イヴとリリスなのである。

なぜ、彼女たちが残されたのか？

それは彼女たちが、コールドスリープから目覚めた男たちの妻であつたからだ。

世界中から集められた選りすぐりの美女、あの老人たちのための喜び組（某北〇鮮の国家元首のためだけにつかえた女性たちの通称）である。

残念ながら老人たちに生殖能力はなく、彼女たちは妻というより看護師役をしていたにすぎなかつたのだが……

国連は、まさかとは思つたが最後の最後におじいちゃんたちが奮起して、彼女たちを孕ませる事があるかも知れないと考え、彼女たちには男たちが死にたえるまで決して諦めてはならぬと厳命していだ。イヴトリリスが13歳の頃の話。

なぜ、こんな子供が老人たちの妻になつたのか？
もちろん、彼ら老人たちの中にロリコンがいたからだ。まったく世も末である。

こうして、地上には年老いた数人の男たちと若いイヴトリリスの二人だけが残された。

案の定というべきか、老人たちはあつという間に死に絶える。

結局、彼らは少女たちに一度も手をつける事なく（インポのため）、少女たちは処女まま残された。

良かつたのか悪かつたのか微妙なところだが、少なくとも人類の希望は絶えてしまつ。

男たちが死んで彼女たち一人は、この時、地球上で動いている最後の人類になつた。

最初、すぐに自殺して皆の後を追う事も話しあつた一人。だが、せつかくだから大人になるまでは生きてみようという事になつたのだ。

せめて18歳になるその日までは……

そして今日。

「お誕生日、おめでとうリリス」

暮れなずむ西の空をバックに、微笑みつつイヴが囁いた。

「うん……ありがとうイヴ」

今度は少し寂しそうに、リリスもうなずく。
今日はリリスの誕生日。先月18歳になつたイヴに続き、彼女も大人の仲間入りをしたのだ。

いよいよである。一人に残された時間は少ない。

「後悔……しない？」

「うん、もう十分生きたから」

「そうね。それに一人だけは寂しそぎるもんね」

「うん……それに、あなたとなら私……死ぬのなんか怖くないわ！」

「……リリス」

「……イヴ」

夕闇のなか、二人の影が一つになる。

濃厚なキスを、時間が止まつたかのように繰り広げる二人。

当然と言えば当然かもしけないが……何時しかこの一人は愛し合つていたのだ。

すなわち、レズビアンである。

「私……男なんかに触れられないで本当に良かった。だつて、綺麗な体のまま、あなたと二人死んでいけるもの」

「本当にそうねえ。生き残つた男たちが、あのおじいちゃんたちで良かったわよね」

「うん。でも、あのおじいちゃんつたら、私のオシリを撫でた」と
があつたのよ！ 失礼しちゃうわ」

「あら、それを言つなら私なんか胸を触られたのよ」

こんな会話の後、一人はくすりと笑う。
セクハラされた思い出も今となれば笑い話だ。

「じゃあ……そろそろ行こうか？」

「うん、行きましょ」

こうして二人は手をつないで歩き始める。

彼女たちの顔に後悔の色はない。

これは愛し合つイヴとリリスが話し合つて出した結論なのだ。
若くて綺麗なうちに死ぬ。素晴らしいことではないか。

彼女たちの自殺方法はもう既に決まつていた。

多量の睡眠薬を飲み、そしてすぐに二人一緒にコールドスリープ装置に入る。

これが最善と思われた。

永遠の若さを保つたまま、一緒に永劫の未来まで共に眠り続ける。そう決めたのだ。

もちろん、生き延びるだけなら可能である。この島はそのための装備を十分備えている。おばあちゃんになるまで一人で行けり。でも、それが何になるというのだ？

もうこれ以上は……何も望めない。

人生最後の日を迎えた二人は、いよいよその時を迎えるため、自分たちの部屋があるコテージに戻った。

「上々だ。それにしても……」「何処なんだ？」

「俺に聞くなよ。あんたと同じで80年も眠っていたんだからな」「ははは、違いねえや。しかし、それにしても人気のねえ刑務所だなあ」

「看守もいねえのか？ 職務怠慢だな。それともみんな眠っちゃったのか」

「ちょっと、外に出てみるか」

こうして一人は刑務所を脱け出した。

偶然なるかなこの二人、どちらもアダムという名前である。そして、二人の犯罪歴も偶然な事にまったく同じ。

彼らは無人となつた冷凍刑務所を抜け出してあたりをさ迷つた。すると、熱帯の森の中に何かを発見する。

「見ろよ、綺麗なコテージがあるぜ」

「うつひょう、中は食い物だらけだ！ 酒もある」

「げげつ、何故だかコールドスリープ装置もあるな……これだけは見たくねえ」

「だけど、寝室にはいいベッドがあるぜ。ダブルベッドだ！」

男たちのはしゃいだ。

当然のようにコテージに不法侵入して、久しぶりに人間らしい生活を楽しむ。

大いに飲み、大いに食つた。

風呂にも入り80年の垢を落としたあとに、ようやくソファーにくつろぐ二人。

すると……

「ふう、さてこうなると女が欲しくなるな？」

「はははは、違ひねえ。もう80年も抱いてねえからな」

「ん？ しつ、静かに！ あれは誰だ？」

「なにい、誰か来たのか？ このコテージの持ち主かな」

男たちは明かりを消して窓から外をうかがつた。

浜辺からコテージをつなぐ一本道に一人の人物が見えたのだ。

アダムたちは知らない。この二人こそ、さつきまで地球最後の人類だった二人。そして今でも地球最後の女性、つまりイヴとリリスである。

「おい、女だぜ？」

「ああ、それも極上のな！」

生睡をゴクリと飲み込んだ。

当然であるう、長いこと禁欲生活を送つてきた一人である。

眠っていたとはいえ、体は欲望に忠実だった。

それに彼らは……無類の女好き。

犯罪歴も婦女暴行がらみである。実に100人以上の女性を歯牙にかけている卑劣な男たちなのである。

「おい、アダム。感づかれるんじゃないぞ!」

「ああ、分かってるって、アダム! いひひひひ、きたきた。あと10秒だ」

「いや、あと9秒だ。8秒、7秒、6秒……」

「あと5秒、4、3、2、1……」

一人はコテージで息を止めた。

その下半身をギンギンにオッたてながら……

そして、そこに、最後の晚餐を済ませようと手をつなぎやつてきたイヴとリリス。

二人の運命は……?

いや、ここでは多くを語るまい。

それは、彼女たちにとつて、極めて悲惨な出来事だったからだ。

この日、二人の間は引き裂かれ破滅を迎える。

たが、一つ良い知らせもある。

それは、この日を境に人類はその数を増やしあじめたといつ」と。

そう、人類滅亡は……避けられたのだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7360e/>

滅亡へのカウントダウン

2011年10月4日20時08分発行